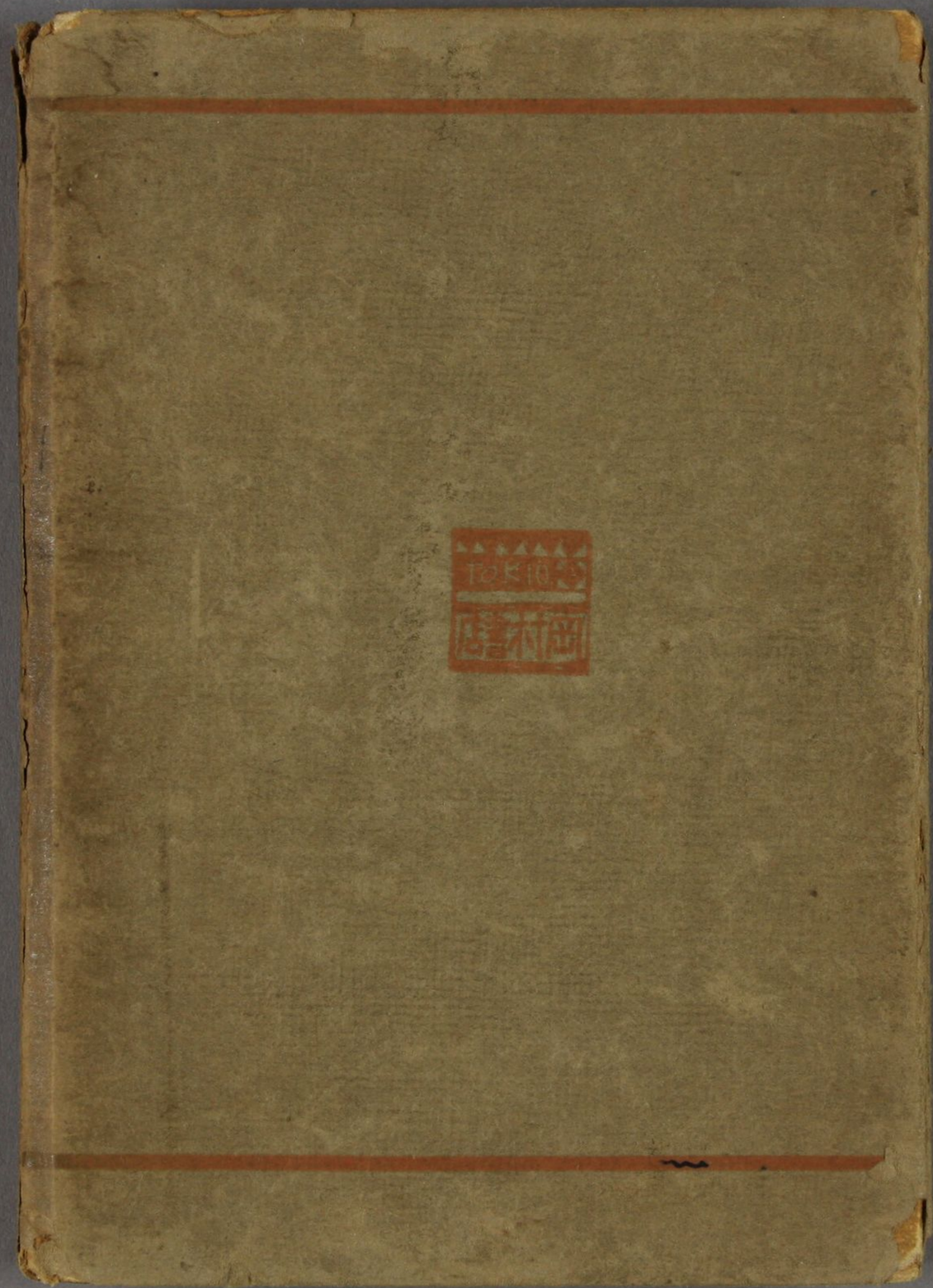
靈 圭

歌集

生靈

* 水明

1915



靈生

歌集

生靈

水明

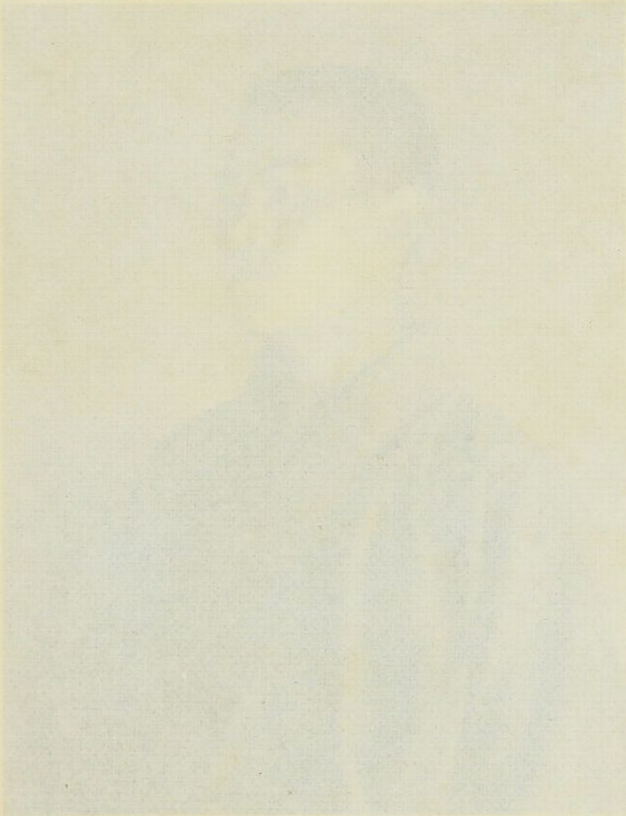
1915

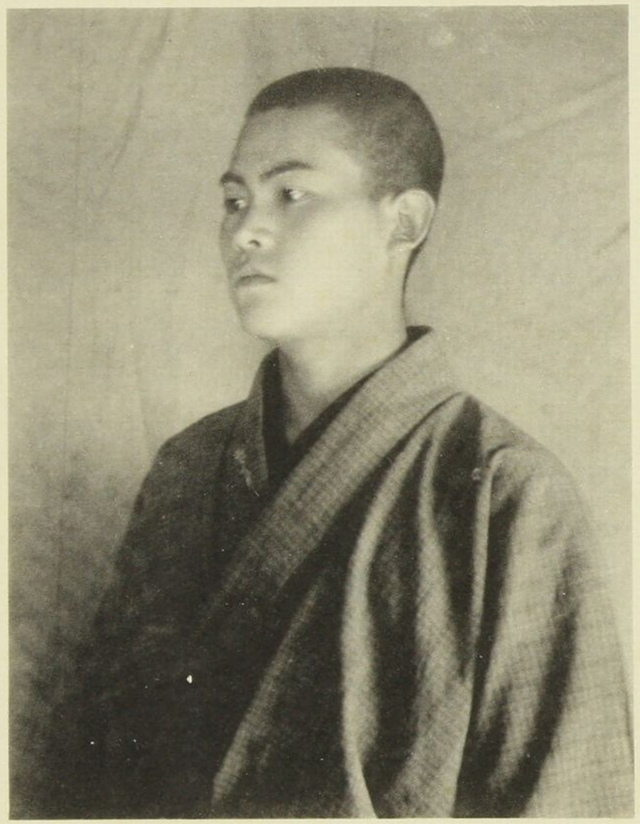
生靈

小川亦明

霊

小川水明





小川水明君。

君と私との交りも隨分永い間續いて來てゐる。私の心に君の名を刻んだ最も始めはいつ頃であつたかを今振り返つて見てゐるけれど何となくはつきりしない、要するに我等が創作社といふ小さな同志の團結を作つた前後に相違ない、そうすると彼れ是れ六七年にもなるであらう。直接に逢つたのは一昨年の夏であつた。それ迄の君をば私はいかにも靜かな、高くはものもよう言はぬ人のやうに想像してゐた、そうして君の名を

おもふ毎に次のやうな君の歌をいつも心におもひ浮べてゐた。

雨はれて水の嵩ます音ひゞく東山
よりいづる月かげ

いつしかにはれて夜空は月となり
ねざめの心かたむきしかな

さやさやと若葉流るゝ夜のかぜに
盈ちぬる月のやゝ傾きぬ

春の彼岸鐘の音をきく悲しさに南

無と指くみ坐りてぞきく

初めて逢つた時は夏のはじめであつた、郷里の越後から出たばかりの君は清らかな單衣を着て手に小さな珠數を持つてゐた。年を聞いて驚いた位老けては見えたが、それでもどこか若々しい輝きを持つてゐた、言葉數も少く、私は自分の想像の外れなかつたことをひそかにうなづいたのであつた。その時の話であつたと思ふ、家は代々神官であるが私だけは禪宗の數に少なからぬ敬愛の心を持つてゐると君は語つた。

それから君は今日までをずつと東京で暮らした。それとはきかなかつたが、矢張り止めがたい心の欲求から此都會を見棄てかねたものであつたらう、そして、その間の心の働きをば君はすべて短歌に於てあらはしてゐた。その一二年間の朝夕は、心の上にも實際にも或は君自身回顧するに苦しい位のずゐぶん亂雜な困難のものではなかつたかといま私には思はるゝ。そう思ふと共にそれには多少私自身にも責任のあることではあるまいかとそゞろに心苦しく感ずる節があるのであ

る。何となれば恰もその間は私自身がまたそれと同じき生活の底に沈んでゐた時で、同時に我等の周圍の人々は君に限らずまゝ同じ狀態に陷つてゐるのを見た。そしてその中にあつては兎に角私が先輩といふべき地位に當つてゐたからである。しかし、これは却つて君をはじめ他の友達の聰明を蔑する愚な杞憂に過ぎぬであらうとは思ふ。

兎も角君はその間にあつて須臾も作歌を怠らなかつた。よし惡しにつけその塲の君の姿をばそれらの歌が

よく表はしてゐるやうである。作歌に對する君の態度は飽くまでも專念一途でその歸依心の熱さ鋭さは我等同人の齊しく尊敬してゐたところである。歌は全くその頃の君の爲には唯一の生命のともしびであり糧であつた。最近にいたつて歌に對し、自己に對し、多少觀るところを異にして來たのを感ずる。此集の編輯の仕方が作の年代順になつてるそうだから、一冊を通じて君の心の異動推移を窺ふことが出來ると思ふ、世にある一般の浮華な態度で徒らに作歌してゐる人達と比べ

てそれだけでも幸福である。生命を惜み、時を惜む歩一歩のこれは痕跡である。

なほ、最近の君の消息によれば、無神經の私ですらさすがに見るに耐へ兼れた位い焦燥を極めてゐた昨今の生活を改めて新らしい境地に君はいま歩をすゝめてゐるらしい、何より欣ばしいことである。そうした場合本集の出版が一層深い意味を帶びて來るのを覺ゆるではないか。更にまた本集とこの次の集とをあはせ讀む日の來ることをも樂み待たるゝ。

大正四年六月七日

三浦半島にて

若山牧水

はしがき

（前略）さて此度は歌集上梓の由にて序文お求めに候へども母は御存知の如く歌のことはわかり申さずその上聊か後ろめたき義かとも存ぜられ候につき左様お含み下されたく候たゞ母はおん身の日頃の志を推して喜び居り候それにつけても思ひおこせば泣きてまで相頼み候ことをも何故かおん身はお用ひなきこと屢々にて候ひしされば及ばぬ身のいかになりゆ

く年月にやと心を痛め候ことお察し下されたく候尙
この後のことゞもいろ〳〵に案ぜられ候へどもそは
すべなき義に候べければおん身が心の上めでたから
んを祈り居り候隨分御身體おいとひ下されたく母は
越後に念じ居り候かしく

大正四年六月二日

茂辰どの　　母より

自序

自分は明治二十五年十月越後の山の中に生れた。
澁海川といふ流れに沿うた茅葺の家に淋しく育て
られた。そして九歳の春父を亡ひ、年を追うて祖父
母に逝かれ母一つの手に人となつた。
幼い頃のことは別として、物心がつきそめてから
の自分は徒らに蹉跌のみ多く、殊に心のたけをつく
したことが甚だ味氣ない終りを結んでる數々を思ふ

と、更に汗あゆる心地がする。

それといふのも日夜危うい心ぐみから中心を求めかれてるうちに、いろ〳〵になり終るからであつた希くばこの徒にあせるやうの忌はしさから、一日も早く逃れ出でたいものである。

おもへばこのやうな自分に、藝術といふものゝ理解などがちらう筈もなく、まして心を許すに足る作のあらう所以もないけれど、追憶のよすがにもと思

ひ立つて集めることにした。

で、歌は出來た順序、即ち十八歳の終り頃から二十三歳の春迄約五ヶ年間の作を追うて配列して『生靈』と名づけた。

本書の序文は辱知若山牧水氏を、跋は畏友土田杏村氏を煩した。こゝに記して微衷を捧げやうとおもふ。

その他、私にとつて唯一なつかしき存在なる母か

自明治四十三年十月
至同　四十四年四月

家を捨て母をすてても行くといふうしろ姿
の子を見るなかれ

何處ぞやわがゆくところ身に代へて母や悲
しく吾(あ)を待たすらむ

ら何か書いて貰う筈であつたけれど、それは母の手紙を以て代用することにした。尙巻頭の小照は今年撮影のものである。

おもへば短き人生にわが心の眼の速かに開けよと祈念せざるを得なくなる。

武藏野にて

著者

大正四年六月

かりそめに思ひそめにし涙かな秋はさびしく別れんとする

もろともに心そめぐりあひにける生命の愛のさびしかりけり

魂(たましひ)を傷けひがみ氣紛れのもの好みして忘れ得たりや

生命をもかへりみずして親を措きいづくまでをかわが溺るらむ

背かじとみづからおもふ心さへ生命の前に見え來つるかな

われをして物言はしめぬ生活の來よとおもふもしたしみのなし

みづからの心をさへも容れがたき軀(むくろ)をいか
にわがはくぐまむ

蛞蝓(なめくじ)の這ひたるがみゆわが繼(つ)がん家の湯殿
のやや朽ちし壁

あまたたび眼移りのせし子は此處にその悲
しさを親に強ゆるのみ

みづからを抑へんといふあはれなる悲しき
悔が身につきて居り

飢えば食ひみつればねむる街頭の犬より惜
しくねむりむさぼる

夜着の襟かみしむる歯の味氣なし涙ながれ
て歯のあひに入る

山寺の軒にたゝずみ雪どけの雫に右手の指
濡らしみる

電燈のたまを塗りたる小箸もて叩きぞ鳴ら
すうらさびしけれ

折り棄てし葦の切れをば拾ひあつめ河に流
してあそぶさびしさ

うすぐらき鏡のなかのわれの顔わがするど
とく唇ひらくかな

疲れたるわが片頰にさしのぼる血によりそ
ひてうち笑はまし

じゝ飴を箸にからげてうちまもり頰ばると
きのわが涙かな

小刀の尖(とが)つき立つる卓の上涙あふれて穴見
えずあり

かいかゞみ雪を握りて食ふわれの涙のすゑ
のなつかしきかな

氷りたる田の面に楮の殼に乘り群れて子供
とうち遊ぶかな

落葉して氷れる雪につき出でし楢の若木に
頬ずりをする

酒にわが涙を交へなつかしく呑みて悲しく
泣き跳らなむ

雪の上藁を燻(くす)べてなつかしく手かざしわれ
の泣き笑はまし

鏡見よかくは眼鈍る鼻つぶるあはれ泣きい
づる顔にやあるらむ

泣きながら板戸を叩くその音の拍子にわれ
のだまされつ泣く

竹の葉に雪明りして絶え絶えにつゆ滴たれ
り午後のひととき

山川の冬の瀬の音のたえだえに月の光に聲
あぐるなり

時のまのあふにまかせてありなまし浮かれ
てものをおもふべきやは

しらじらと障子にゆらぐ明け方の風のあは
れに眼をとづる床

枕する肩のすきよりしのび寄る冬のあはれ
の身にしみてける

寄り添ひて母子がねむる冬の夜のあはれに
むかひ輕う眼とづる

さやさやと風の流るゝ冬の夜の寂ざめさび
しきわが枕かな

涙ぐみあはれ眼とづるさびしさに人の情け
の浮び來るあり

わがねむる古びし家の冷えまさる冬の夜か
ぜの戸に流るあり

風つのる冬の夜眸にまたゝける灯に匂ふ小
指さびしき

かくしつゝあるもうれしきさびしさとふと
しも唇にのぼるほゝえみ

ふとつきし吐息寐ざめのはづれたる肩の肌
へにふれし夜の床

戸を出づれば夜の氣つめたく流れ來る深夜
にみゆる山のしづけさ

霧ふれる冬の夜雪に落ちしける戸のすきの
灯に涙さそはる

風明う梢をふきてうつゝなく組みたる指の
さびしきゆふべ

うつぶせば隈なくわれをつゝみたるおもひ
わりなくしたしまれぬる

雪明り遠の峰の上の雲にさし眼とぢたる身
のほの浮びつる

歸らざるわがおもひゆゑなさけゆゑしたし
みおほきわがなやみかな

くまもなき心やつしにまぎれてと床になさ
けをたのみましかば

たへがたくねむりにのみぞつゝみたる情け
の人に迷ふさびしさ

などてかく心のなげきしたらむたのまれ
じとも添ひて見ましや

寂しさがあはれ衣服(きもの)に浮きいでて林の雪と
うちむかうかな

林なる雪もやわれにいかにして悲しきと問
はば逃げかへらなむ

被りたる夜着のうらにもたのみ入るなさけ
さびしきわが涙かな

まことなりたのみ少きみづからのやさしさ
によりまたや誓はめ

身をしのびほゝえむ夜のさびしさに眼とづ
れば灯の匂ひぬるかな

冷えまさる夜の心のくまに來る風にねざめ
のまぶたつめたき

おのづから心にたのみゆるされて僧となる
日はうれしからまし

〻さやるなく月に生命を匂はせてねむるが如
く死なまほしけれ

口惜しくも死にたる人の靈(たましひ)のわれは笑顔に
いそぐことかな

むざむざと四つ這へになりふた三足あゆむ
もうしや顔あげにける

さびしさのいかばかりにも匂ふやともろの
わが手をさしあげてみる

あかあかと雪に流れし夕陽に鳥がなけば泣
きそうになり

さびしさに開(あ)けてゐたりしわが口に何かさ
〻えをかいて見ましや

はや馴れて顔も洗はぬ大勢の村の子供がわ
れ呼びに來る

わがために一人歌へば大勢の子供がつれて
みな歌ひ出す

〻腐りたる茅葺の家根母が見て立てるはさび
し見るにしのびず

夜をひと夜こゝの林に明さなむ生命のなさ
け汲みて見るべく

涙流しわれは山川越ゆる身の母に病のなか
れと祈る

〻鏡一つ購ひ來り悲しさのあふるゝときに見
て話する

泣きそうに歌をうたへば子供等が早くも眞
似て泣き節をいふ

蠟燭を購ひ來りその夜よりつけて拜みぬ悲
しきまゝに

線香の香のなつかしくなりしより焚きて聽
くことは　やゝく度なる

今一度泣きて見よかしこの鷄はわれと異る
泣き聲をあぐ

杉の樹の林のなかのみ社に仕へ奉らむ亡き
父のため

春の彼岸鐘の音をきく悲しさに南無と指く
みすはりてぞきく

あはたゞしく「れい」を疊にすえにけりふりて
見たりしそのかなしさに

鐘の音に泣く泣く椿手折り來て父の位牌に
手向けまゐらす

たのむまじ身をうきことに添ひつるは佛の
道に背くべければ

川に來てひとり遊びてゐることの悲しくな
りて家に歸りぬ

釣りあげし魚を捕へてその鰓にわが唇づけ
てまた放ちける

小さなる珠の古びしわが珠數の戀しかりけ
り山櫻花

うす暗き御堂のまへにかしこまる深山のひるの山櫻花

古寺の釣鐘堂に散りかゝる櫻の花の生命をおもふ

よくまわるこのわが獨樂のものをいふこともあらばと今日もまわすは

古寺のみあかし灯る内陣に光つめたきやまざくら花

宮柱太しくたてるみ社のみ階のしめの藁もむすばめ

自明治四十四年五月
至大正二年二月

雨はれて水の嵩ます音ひゞく東山よりいづる月かげ

江にのぞむ樹の下枝のかげの濃くうつりて暗きをそ月夜かな

わが夜目にさやけきほどにつぼみたる雨の後なる櫻花かな

うすぐもる有明頃の水の田のさゞ波のなかに蛙なくなり

蛙なく水田に近きわが閨の北に枕をすべき頃かな

ところどころ夜天の空に白雲の浮べるがあり終りの彌生

まだ啼きてありぬとばかり起きいづる有明頃の田の蛙かな

朝ごとにきけば少くなりまさる田打ちの頃の蛙かなしき

夏淺み瀬の音の近くひゞき來る雨ののちなる朝のすゞしさ

かの丘に夜目にもしるく見えぬるはうすくれなゐの櫻なるべし

皐月まつあやめの草の芽の萠えてひと雨ごとにのびてゆくなり

終夜なきてをやまむ蛙すむ田の面の水にやどる月かげ

ふく風にふたひらみひら散るさくら數へて獨り音に泣くゆふべ

飛びつけどあがりもかねつ田のなかの古井に落ちて啼く蛙かな

魚釣ると雨の降りくる河原にて絞るべきまで袖ぬらしける

いつしかにはれて夜空は月となりねざめの心かたむきしかな

うす雲のゆらぎてみゆる夕月夜幽かに風の空わたるあり

野の蓬、細江のあやめ刈りとりてさ月を祭る母と子の家

宵々に木がくれ傳ひのぼる月今宵はいたく盈ち來ぬるかな

有明の月の殘(のこり)をおもふにも夜はみぢかくなりにけるかな

月はいま若葉の茂み洩れ出でて風のそよぎ
とうちはなれぬる

蛙なく夜の肌のさみしさに衣手かさねひと
りくぐまる

床に入り蛙の聲のあはれさをまたきく夜か
とたゞずみてける

死なましとおもふにさへもわがこゝろわれ
の身寄りによるを何とせむ

めづらしき山田の畔(くろ)の杉菜草つむにもあま
るなつかしさかな

雨ふれば一夜といはず山川のさゝ濁りする
さみだれの頃

草に寐てぬれし袖ぞとながむれば雨後なつ
かしき野のわが身かな

雨はれてさ月の空のさやけきにうす紫に桐
の花散る

雨の降るゆふべは殊にはやくより母とふた
りし蚊帳つりて寐る

たそがれにいたりて雨の降りいでぬしづか
に草の濡れゆく夜なり

雨の降るある日なりけりしみじみと母が衣
縫ふさまながめ居り

葉櫻のかげに立ち寄りやうやくに涙ぬぐひ
し夜もありにけり

山のなかにいともさびしう生ひたちぬ生れ
し國の越後よかなし

いと寂しく一樹一樹のしづまりて七月の陽
のくれそめにけり

一人なればつねにさびしき獨りなれば遊び
にのみは街にいづるな

身につける人の汚れをいかにして清めつべ
きかひとのかなしき　（三首人に）

おもひいでて涙ぐまるゝわが肌を悲しき人
よ君にけがせり

前髪のうらなつかしさやわらかさ今もかな
しく身にのこるなり

月かげもほそくつめたし夜ふけてつゆとも
なるか蟲のなく音よ

何といふさびしき花ぞ葉もほそく月にてら
されたてるすゝきは

汝が長きひげのわが手にのこりけりとびし
かあはれ松蟲の子よ

露にぬれすゝきの原をかいくゞり穂を抜き
あそぶわが月夜かな

すむ月のいろより寂し蟲の啼くすゝきの原
の風になびくは

秋立ちぬ風になびける茅の葉の穂よりもほ
そき夕月のかげ

うつろなるむくろをのこし秋とともにわれ
の生命の遠ざかりゆく

人の子と生れ來にけるさびしさよわれの生
命のよりどころなし

身に添はぬ悲みなればいかにかは
せむいかになるとも

母も見じ家もおもはじ見かへるなかなしく
すでに生れ來し身ぞ

女郎花汝のすがたにより似たるわがさびし
さぞともに語らむ

灯のまへに來てとびまわるこほろぎの羽の
黒さよ秋はさびしき

いく度かながめに來んぞ荒濱のひともと名
なき木よ葉落すな

茅の葉のひと穂をぬきて枕とし草むらのな
かにわがまろびぬる

風さむく草の上をふく脚ながきこの青蟲よ
身をいたむるな

手枕のしびれ覺えて起きあがる眼に草の實
の裾につくあり

秋桐のひと葉をもちて茅の根にわが寐て居
れば雨の降りいづ

眼をとめてみればすゝきに尺とりの風をさ
けつつのぼるさびしさ

大河に流るゝ秋の水のいろをながめてひと
りわが立つ姿

山をみよ河上遠く晴れわたり秋のいろこそ
匂ひそめけれ

大河の水の深きにたゞ一人櫓をあやつれる
老いし水守

床の上に寐をも急がず手をつきて瞼も重く
何をおもふぞ

魚賣りの聲にさそはれ何事ぞわが唇にのぼ
る節眞似

大空の底ひもわかずふる雪の河水の上に消
ゆるさびしさ

せきあぐるわれの涙を人かげにぬぐひて立
てる夜の壽座(ことぶきざ)

故里に母と二人しすゝればか今朝の粥さへ
さびしかりけり

冬の夜の月にてらされ雫する軒の氷柱(つら)を折
りてわが食ふ

終夜(よもすがら)椽の下にて音せしは瓶に落ちたる鼠な
りしか

音もなく烏一羽が杉の樹にとまれば落つる
わが涙かな

眼のまへに姿はかはれ歩み來し生命(ゐのち)ある
に心ひかるゝ

夜着かぶりいねて夢を見さめて夜の寒きに
心われの身に添ふ

わがなすこと、言ふこと見きくことすべて涙
の種となるざるはなし

いたはるにすべもあらなくなりぬれど生命
いぢらしすてられもせず

たゞ獨り疊の上にかくすはりわがあること
のいふべくもなし

あなさびしわが身動(にろ)けばかげに似しものあ
りわれをつかずはなれず

日のけじめ夜のけじめのいつしかにわが身
に添ふが如くかなしき

しかれども瞼あはさば夜は夢にわがさびし
さのしのび寄るべき

夢にさへ心のかげりさし來るおもふにだに
も憂しやわが身は

われとわが心のうちにたゞよへる寂しさの
なかに幾年を經し

木の上に雪の降るこそわれの身に心のかげ
りさすとひとしき

いねしまにいつか涙の流れけむこはさはい
かに身をいとふべき

母をおもふその心根の世の人に劣らねばこ
そ死をもおもはめ

雪の上に小さき尾をふり足跡をつくる林の
鳥の身なれや

日に夜にわれの心のあやうきにあはれや生
命眼も盲ひぬべし

わが生命草の如くに生れいでて根さへわか
たず地に朽ちもせず

おのづから心のいろのあらはれてさだめの
まへに見えもてそすれ

歸り來てあるひは惜しき生命ぞと涙ながし
て身や嘆くべき

樹よ汝れは土に根の生ひわれは地の上に迷
ふが異なれるのみ

やがて朽ちむ汝ぞとおもへば青ぐらき葉を
もつも樹よ眼を痛ましむ

朽ちよ地に朽つる木よ汝が生命をば何とど
むべき生きもののわれ

生を享けて世に生くことの悲しさよ人とい
ふ名のわれも樹なりき

わが生命地に犯(おか)され苦むして朽ちてゆく樹
と何えらぶべき

すべからく口開かぬに如(し)くはなし見よ樹は
悲し葉をのぶるのみ

いとはしき世ぞと嘆かばわが生命いかにか
なしくなりまさるべき

咲け櫻(さくら)かゝる悲しきいとはしき世に咲く花
の姿戀しき

はらはらと二ひら三ひら地に落つる櫻に似
たるわが涙かな

散りゆきてふたゝび梢(うれ)にかへらざる櫻の花
の生命なつかし

散りし花よいろも匂ひもそのまゝに地より
生(あ)れよわが棲める世に

横ぶせる峰(を)の上の空の仄明(ほのあか)き彌生の空の嵐
するなり

すつるを得ぬ生命をうけて捨てどころなき
世のなかに無限に迷ふ

仄かにも彌生の空の嵐するかゝる夜に散れ
花さくらばな

散る花のゆくゑ空しく天地のしゞまのなか
にあり終るらむ

いかにさびしく櫻の花の咲くことぞありな
しの身に風ふく彌生

かゝるさびしき色に匂へる櫻花のわが地(つち)の
世に開くといふは

われ朽ちて浸(し)まず乾かぬ水となりふるゝも
のをばみな腐らせむ

さなきだにいとふべき身に根もわかぬ心の
あるかなやましきかな

日光を遮り強く痛ましき光をはなつ青き野の草

ゆくところわれの生命の朦朧とけぶれるさまの眼に映ゆるのみ

石を持ち草のなかなる青蛇を追ひかけありく野のひとりかな

草をつみかざせばわれのさびしさの顔に集り泣き面となる

樹の花に地の底ひのさびしさの集り咲きてわが眼にうつる

時折りにこの子死ねよとひそやかにほゝえむことの母にあれかし

草原の風にふかれて頬にまろぶ夏の涙にい
ふこともなし

友が家の梅の樹の下青梅の一つに心集めわ
が嚙む

ふたゝびは妻をもつべしなどとわれ人並の
ことおもふまじいぞ

やるせなげにのべし片手の醜くさにわがつ
まされて寐がへりをうつ

みかへればうすく陽のさしきらきらと甍の
光り柏崎悲し　（五首柏崎にて）

柏崎の灯かげのほこりわが浴びてのぼる女
郎屋の櫻樓の二階

柏崎のお女郎屋櫻櫻おいらんのおひな可愛
ゆやわれ悲しまむ

痛ましき肌の女郎傷ける玉にも似たる生命
の女郎

桃買うて食べんおいらん生々としたる桃の
實切りてやしなへ

あたらしき悔よ來りねいたみる生命のいか
に汝に見ゆべき

いまにして何をとゞめん頬を傳へ涙のみな
るわが世ならんを

さびしさにえ堪ねばこそ戀もすれ男ぞ誰れ
が女おもはむ

生くることのいかにかなしくいとはしくな
りまさるとも生命まもらむ

聲あげて何をいふべきみづからのこゝにあ
るさへ眼にうつり來ぬ

頰に傳ふつめたきものを手にとりて汝は何
ぞと言ふよしもがな

こはわれか人かけものかかくてなほ一人の
母に涙さするは

おのれのみ生くるに難きことやはある人も
おなじく涙する世に

溪水(たにみづ)のかたへに添ひてわがあゆむゆふべの
山にうす霧ふる

悲しさよ山を歩めばわが袖に消えつ殘りつ
うす霙する

悔ゆるべき心のありて後にこそ流るゝべき
を何の涙ぞ

弟に榾火焚かせてうとうととねむるは寂し
冬の爐の邊に

しかれども生命すつるに涙さへせじと誓ふ
に何と堪ふべき

常盤木のかげあを暗く雪の上に落ちてさび
しくにほふゆふぐれ

ほゝえめばわがさびしさの水よりも寒くつ
めたく頰を流るゝ

夜は夢をかゝる身になほむすぶことといかば
かりなるあはれなるべき

白大正二年三月
至同　二年五月

雪氷る越の國なる如月の夜のしづけさや梟
の啼く

糸となり降る如月の夜の雨の如くにそよぎ
われの愁うる

雪の香や樹々の匂ひやうるみたる月より落
つる雨のにほふ夜

起きいでて歸りねむるを夜半なれば母知り
まさず弟え知らず

さびしさにおもひ屈していぬるにも心のう
ちの貧しさを戀ふ

獨りをおもふ人の心のかなしきにわれの心
の貧しきに何にかにつけさびしきまゝに

茅葺の家のさびしき香のわれにうつりてほ
のに匂ひいづらく

斷ちがたきまゝに愁のかずかずを生む源と
生命をおもふ

同胞(はらから)といへるさびしき名のもとにわれらは
一つ家に棲むなり

雪消ゆる如月頃のさびしさに軒端のそとに
たちて夜をまつ

わが愁ひ風に消えゆく如月の夜の雪の音に
たてよとぞおもふ

消えよ雪汝(な)が消えゆくを消えなむとおもふ
わが身の何とゞむべき

夜半に迷ひ出でてかへさに月くもり雨のそ
よぎに濡れてかへりぬ

雨に濡れかへるわが身の悲しさよぬれし衣
服を着てわれの寐む

雪の上に夜のあはれを愁ひつゝ寐にもかへらぬ人こゝにあり

生命をおもふのびつちゞみつうれひつゝ日を重ねまた夜を重ぬる

わが妻となる子をおもふ若草の如き心のさみ子をおもふ　（四首さみ子に）

さびしきがなかに二人はいつしかに夫婦（めをと）となりてありぬ如月

唇づくれば雨にぬれたる白花（しらはな）の如くに妻の眼を開くなり

褄重ね悲しむごとくよりそ添へるわれら二人は夜は匂ふかな

人の聲鳥の聲世はつくづくとさびしきもの
にみてるものかな

いねもせで床に眼をとぢわがあるに風や生
れし戸に音のする

如月の夜のしづけささやさやと流るゝ風の
なかに雪みゆ

風ふけばさびしき匂ひ如月の夜の雪にたち
空みたすなり

越の國は雪の消えゆく音に暮るゝ如月の夜
にみたされにけり

わが棲める世よりさびしく音もなく幽かに
雪の消えゆきしかな

土の世に棲める生命のさびしさの端とりどりに眼に浮ぶかな

心暗くかげるはわれの常なればとわがさびしさを深く愁ひず

なつかしく棲み一寐るなり敷島の倭(やまと)の國の如月の夜を

愁深きわが若草の生命のみ棲みて寐るべき所あるなし

朝日屋といへる旅籠(はたご)にやゝ愁ひつかれたる身の部屋求めけり

如月のさびしき海の果に浮び煙の如く佐渡が島みゆ

潮の音の絶えず生るゝそがなかにまじりて
われの愁たゞよふ

遠くより汽車に乗り來て疲れたる人なぐさ
めてわれの寐につく

憂ひふかきまゝに相寄り言もなうさびしき
なかに唇づけてゐぬ

柏崎のとある旅籠に寂しくもわれ等ふたり
の一夜寐にけり

自大正二年六月
至同　三年四月

旅に上りて武藏國多摩河のほとりに
ありき

春は來れど心すべなし貧しければ背戸の櫻
をたゞ見やるのみ

病ましむることあるなかれ貧しさに棲める
はらからのこの七人(なたり)に

貧しきをわがおもふときわが生命も心もと
もに腐るが如し

貧しければ母妹がとりどりに人の噂をする
がかなしく

この家に生れて育ち相離り今日し集へるう
からはらから

つくづくと見ればわが家はさびしくも萱(ぶ)き
たる屋根の朽ち腐れたり

垢づけるつめたき枕われのして足をながな
がとのばして寐るも

旅にたてるわれの噂を夕食の箸をとるだに
母するらんぞ

今にして母を眞幸(まさき)くあれと祈れど書き送ら
れず心はとゞけ

忙しさに氣を揉む母に弟どもは相爭ひて叱
られてあるべし

茅葺の家に群り夕烏(ゆふがらす)なくをひとりし母見や
るらむ

火をば焚けあかりをつけよいざ掃けと子等
を相手に母は稼ぐべし

多摩河の水を掬(むすび)びてわが泣くといかで知る
べきふるさとの母

母の手紙わがゐぬ家を寂しみて早く寐るとや讀みて涙落つ

末の弟は蚊帳のなかにて寐騒ぐとやあのまろき足を蚊は刺す勿れ

家を出づるとき花だにもたぬ納戸の裏の畑の胡瓜實となりぬとぞ

母しあれば遠くさかれる越後の方の空を見やらぬゆふべとてなし

旅を終へわが歸るまで母刀自の髪は白むな肉は瘠するな

生くる生命を悲しみ旅に立ちしわれを待つらん母の心根の悲し

母とふはかなしきものぞましてわれの如き
子の母たるべかる身は

われやげに母の子なりき子のために情ふか
〻る母の子なりき

かゝる母をいかにしてましいたいけに老い
てゆくなるこのわが母を

母のまことの心のほかにこのわれの頼むべ
きもの一もあるなし

われの如き子を持つ母の心のうちは人に言
はれぬ涙なるべし

秋は來れど故郷遠く茅の穂を見にかへるべ
きすべさへもなし

秋となり母の顔にもさびしさの流れだるべし見に歸りたや

はや秋となりしか旅の浮寐はするに寐ざめ蟲なく母の戀しき

秋か秋か心流れてとゞまらず旅に母戀ひ家戀ひ居れば

母戀しこの多摩河の道のほとり後姿の似る人のあれ

かのきたなき家に歸りてわが寐るは石に寐るよりつめたかるべし

秋の桃三つ四つ食へばしくしくと腹の底さへつめたく痛む

古里の母の心の多摩河の靄にこもるかゆふ
べ見て立つ

ゆふべ靄立ち山隠るともふるさとの方なる
空をゑは忘れめや

歸らんとわが立ちあがり見やりたるゆふべ
の山は河の上に立つ

筏流すと群れたる人々の聲々は河浪の上に
浮び流るゝ

見かへれば河の中なる岩に浪の白く碎けて
夕風わたる

はやたそがれの岩のかげ立てば河原に人の
音もなし

秋のゆふべの空に眼やれば曇れるなべ高く
飛ぶ鳥見えてさびしも

河の上にせまり重なる山々に靄たつゆふべ
流るる多摩河

多摩河の秋の河浪ゆらゆらに岩かげにさし
寄する夕ぐれ

旅にしてながむる多摩の河岸に茂れる竹の
籔をいかにせむ

こゝにして見ゆわが來し丘の小松原かけ崩
れたる河の崖の上に

旅の男のわれが眼をやる山脈の上なる空は
いづこも曇る

眼をあげてわが見て居れば動かざる木の葉
ぞゆらぐ風立つらしも

杉の木の林のなかに鳴ぞなく雨ふるらしも
空くもり來る

河の中の島に流れ木つまれたるそのかげあ
たり河千鳥なく

ゆふべ雨ふる多摩の河原の岩かげに佇みた
てば濡るゝわが袖

雨ふれば夕飯(ゆふべ)煮るその煙りたちものぼらで
野に迷ふなり

ちゝと啼き雨のはれまを河千鳥飛びたちい
でぬ岩のかげより

河千鳥尾をふり鳴くか多摩河の河原たそが
れ雨ふり來るに

折から鳴れり何處の汽笛かへらんと下駄穿
きなほし立てる岩かげ

河上の山なみの上曇り日のうすれ陽(ひ)洩れて
たそがるゝみゆ

渡し守人を渡すと多摩河の秋の船漕ぐ綱手
かなしも

山々も靄むら立ちて秋の雨ふる日を絶えず
見えがくれする

河の上の山に群ら立つ白雲の旅の空なるわ
が身この姿

河千鳥啼く音のかたにうすれ日洩れ水はゆ
らぎてゆふべ見えけり

水の上にゆふべ降り來る雨の粒雨の粒見る
眼いとはし

山に迷へる雲の消ゆるは何方の空ぞも見や
る眼もゆふべなる

こはわれの心かゆふべ降る雨に濡れつゝ咲
ける山茶花の花

ゆふべ見て立つ多摩の河邊にたつ霧は煙か
もうし空に消えゆく

旅なる空ゆいゆき憚かる白雲のふるさとの
方は眼路はるかなり

山脈の上よりさせるかぎろひか夕空はろに
流るる微光

林檎買はむと立ち寄ればはや風のわが姿を
ガラスの上に誘ふらし

戸を出でがてにマント着て立つ明けんとす
る空まだ暗く木葉さやげり

空のいづくに消えゆく星ぞ朝まだき風にさ
揺れて煙のごとし

棕梠の葉ぞか黒くさやぐ明けんとする闇の
さ揺れに風たてる見ゆ

黄ろく赤く乾き枯れはて風たゝば散らんと
木々に葉や揺ぐらし

見やればとて故郷は空のはてやはてわが眼
はゆかずおもひよゆくな

岩かげにわが立ちたちてみる水に浮べるく
さ〳〵の木の秋の落葉や

クリスマスわがひとりなる部屋にもち歸る
べく今宵何や買はまし

人もかなしき心なるべしふらふらと夜店の
前に立つ影のあり

吾妹子と物を買はんといでたてば店の品々
あまた悲しも

ぬぎいでし肩のすきより風や入らむ吾妹子
よとく枕しなほせ

歸らまく惜しき今宵の袖袂吹くべき風の街
に立たぬか

夜は深し遠く汽笛の音のきこゆ歸りやすべ
きなほや居るべき

自大正三年五月
至大正四年五月

大御后神あがりあがり給ひぬと國民(くにたみ)の聲天(あめ)
にきこゆる　（昭憲皇太后奉挽二首）

神あがりあがり給へる大御魂太御后を祈(こひの)
奉(まつ)る

のりすてし電車のいまや淺草の賑ひの邊を
走りゆくらめ

油煙流るゝ夜店の明り見にゆかんわが如く
なる人もたつがね

東京の街に屍を措くところあらず貧しき友
亡びしも

人知れず友は亡びぬ死顔に空より汽笛のひ
びきたるも

寂ることをたゞ一つなるたのしみとするが
如き身われにし泣かゆ

武藏の國野は明る妙照る妙に白雲ぞ立つ野
にいで來れば

上野には櫻の花が咲きたりといふて通るに
涙ぞ落つる

樫の梢に風は通へりしましくは母をぞおも
ふ照る日を見つゝ

出(いで)る日の朝(あした)に勤め照る月の夕に罷(まか)り年の經
べけむ

ふと母よと音には出にけり櫻さく都の夜の
涙ぐましも

豊かなる都にわれの籠り居て働ける力惜し
けくもなし

大き都に月を經れども古る國の母に申さむ
言の葉もなし

櫻さき都は春の賑へる時にし天(あめ)の雪は降り
けり

わが嘆き天垂らしたる白雲の大き都の空に
もあるかも

古郷のうく辛くして家出せるわが籠りゐて
嘆く大都

大き都はせむすべつきて泣く時ぞよろし顧
みする人もなし

嘆けばますます思はつのる苦しくてつまる
が如く息は出にけり

わが棲むは榮え賑ふ大都人に涙をわが見せ
めやも

大空に夏はも來るか葉を茂み都に春の櫻は
散りぬ

眞悲しみわれのもだしてある頃を天(あめ)を翔(かけ)り
て燕來にけり

ねがはくばさむる勿れとわが枕ひき寄せ今
宵ねむりにはつく

小田巻の鉢を買ひたり寐るまへの心の花と
開けよとしも

慰めにせんとおもひて獨り身の男が買へる
花小田巻ぞ

今朝もまた雨戸をひけば木々の枝そよぎて
空の晴れて見えけり

芽をふかぬ樹ありや心かなしきと五月一日(つひたち)
野めぐりをする

休み日を惜しみ悲しみ淺草の木かげの椅子
に枕ける手枕

たまたまに歩む夜なれば都の空更けゆくこ
との惜くもあるかな

小田巻の葉のみが青し胡座(あぐら)くみ涙ぐみたる
われの眼のまへ

わが買へば色も濁りて見ゆるかな葡萄酒よ
汝を水に棄つべし

じつと悚(こら)へし心の辛(つら)さ町端れ近くに來れば
涙とぞなる

夜深くおもひあまりて手枕をわがして居れば涙落ちくる

まことさびしき夢にありけり悲しくてホと息つけば眼のさめてけり

わが泣くによろしき所ありやとて町裏めぐりする夜の多し

ゆふぐれの銀杏の若葉つみとりてわが涙やら鼻やらぬぐふ

この手紙妻もさすがにわが心うらみつらみて書きにけらしも

ゆきずりに摘みたる杉の青き芽をゆふべふくめば澁くもあるかな

ゆふぐれをわが眼のまへを歸りゆく小女子
の髪垂れてねたまし

杉の芽を摘みて居るべしわが如き男は人と
交るべからず

ポツリポツリとわが着る衣をうつ雨の粒の
夕の空に見えなく

ゆらゆらと空に消えゆくひとすぢの煙にむ
かひ朝をいとへり

掌をつきて母の寫眞にもの言ひき涙にくも
り眼も見えずなり

おもふまゝ歩みくらしてかたよれる街にひ
と夜はわれのねむらむ

うなだれしまゝにひそかにうなづかんほど
のあはれの聲のおこり來

わがために越後の母が送りたる青き蚊張着
て涙ぬぐはむ

かたかたととある冠木の門にある名札の風
に音たてゝゐき

わがもてる古き毒藥妹の齒にしのびかに嚙
まれたりにき　（おもひで五首）

幸に古びてありき毒藥の味いかなりし妹か
たらず

毒藥を口にふくみし妹の心のうちのいたま
しさかな

妹のために淺間の麓より巡査が急ぎ打ちし

電報

ふるさとの土藏のなかに母とわれ立ち泣かせたる愛(は)しき妹

ゆくすゑのことなどおもふゆく春のうらさびしさに口を噤まむ

われをして遂にさびしくならざるを得せしめざりし心のよるべ

わが心よそつと越後にしのびゆき母の心をいたはりて來よ

ふたゝびはわれふるさとにかへらじといとはしく身の涙してけり

みづからの葉が重くなり倒れたる無花果の
樹の心を呼ばむ

うちしのび都をいづる晩春のあとなし人の
群れにまじらむ

晩春の街より街へ歩み寄るさやりもなさに
流るる涙

はじめよりよるべもあらぬ寂しさのつひに
わが身となり終りけり

ゆらゆらと畑にゆらぐ麥の穂の聲ともなれ
よ春も晩かり

坐り居ればわれの心はよろこべり動くべか
らぬ朝にしあるか

頬杖をつきてしづかにおもふべき窓ある部
屋をたづね求めむ

見も知らぬ河岸のほとりに部屋求め船など
見つゝねむらんとおもふ

友とはなれて物をおもふがくせなりしつひ
古郷をしのびいでにき

旅の子の心は悲し手枕の夢のうちにも母を
いとへり

日歩(ひあし)かげらぬうちに急がむ河岸の船しづか
に浪にうちゆらぐ見む

白雲のひろごり曇り大粒の雨ともなれよあ
はれ眞晝日

秋近づきて
よめる

そよ風ふきまだ明けやらぬ東雲(しのゝめ)のいろに見
ゆるは秋にかあらむ

朝なりしほゝえみしことを覺え居れり何な
りしそのゆゑのなつかし

生きてゐむと朝の空を見ておもへりき遠く
烏(からす)の聲もきこえて

朝な朝な窓の戸開き空を見ることたのしみ
にしては起きいづ

氣のつまり氣のつまりしてそれとなく目だ
ゝぬほどに弱りゆくらむ

浮き心くつがへさるゝ驚きにいやさびしく
も堪へんとすらむ

わが心よ膚(はだ)の如くあれかしねむるときなど
撫でておもはむ

いろいろのことに埋れてほろびたる日の見
え來る物をおもへば

困りつゞけしくせにやあらむ氣がゝりのこ
とのなき日は何か足らはず

何か知ら心がゝりの出で來るを朝のうちよ
りまちて居るかな

人の言葉につまされがちのわがくせの返し
の文を何と見つらん　（道子に二十首）

手を組みて額にあてゝしみじみと吐息のう
ちに君をおもへり

わが心みな奉るすべなきか身の置き所なく
ぞ戀しき

まことなる二人の心相合はゞ誰かあはれと
思はざるべき

人言に耳な貸しそね疑の心おこして吾を泣
かしむな

君を失ひわれの泣く日の來るともわれは悔
ゆべき心はもたじ

山を隔て何處の國に君がゆくとも心おさへ
てわれは泣かじよ

或時は涙を垂れて君が心のわれを離るゝ勿
れと祈る

然れども君を失ひたるときは土に額ふれ泣
かんとおもふ

別るゝも戀の破れにそはあらじ迸り出よま
ことの心

道子とはいかにせし子ぞわれをしてすべな
きまでにしたひ泣かする

君が宿や海のひゞきのなかにして夜は油火
の搖るゝなりけり　（興津にて）

海ぞひの寂しき街の月明き夜なりきわれ等
戸をば引きにき

海見ゆる二階の窓の戸を開きひるを寂しく
人の髪梳く

火鉢の火小さき土鍋飯を煮てさびしくわれ
にすすめてし人

泣くをさへゆるしたまはぬ底ひなきさびし
さにのみ堪へぬる人よ

さゞ波の寄する興津よ病みたまふさびしき
數にわれもまじるや

歩みいでて草の花など摘み給へ君が心を花
守るべし

ねがはくばわれをばおもひいづること君が
心の上にありそね

しかれども幸君にありときゝ涙の落ちむ日
は何時ならむ　（以上）

胸のあたり痛くなるほど考へつめ疲れし頃
を眼に浮く涙

腹の底より吐息となりて唇にのぼるものあ
りて窓の戸を射す

窓にみる夜の空青しよもすがらあゆまむと
涙ぐみて家を出づ

今宵小田巻の鉢に水さし、しみじみとわれの
生き居る

蒼くはれたる空に風あり、ふつふつと湧くか
なしみに眼に涙みつ

腐れ木の夜の光の如きものわれの肉にも骨
にもひそめり

見まじきは朝の空なりとぢしまゝ開くまじ
きはわが眼なりけり

手枕の右の足のべ窓障子あけたりたてたり
わがサノサ節

悲しくて迚も出勤しかねると支配人まで書
き出す手紙

絶えて消息せざる言ひわけわが友にたのみ
て母に告げやる夕

風の吹けるに涙ぐめりきあまりにもわけの
なくなりはてし心よ

肩のあたり疲れを覺ゆ風の窓に久しくも手
を垂れしものかな

いつもより齒などしづかに磨く氣になれり
き何の心なるらむ

ねころびて身體のつかれ覺えけり疊につけ
し耳のほてるに

雲迷ふ山のふもとべ湧ける湯のそのいく所
人のたづぬる　（赤倉溫泉に遊びて七首）

國原の煙りの如くのたうてる秋のはじめの
空ぐもりかな

山々のあひの平（たひら）にはるけくも村の見え居り
煙のぼれり

高原の空ぐもりせる遠近に夏鶯のなきてやまぬも

夜は母の肩など打ちて油火の湯屋のあかりに物おもひする

御嶽登山講社の群れが鈴ふりて汽車にうたひし歌のふしかな

信濃路の汽車にながめてすぎ去りし待宵草と秋桔梗かな　（以上）

何となき心おこりていねられぬまゝに倚りたる夜の窓かな

灯火のいと明るきになに心なくうなだれてゐたる物思ひ

夜半にふと眼のさめたりき何とせし心のゆ
ゑのすさびなるらむ

風やゝにおこりて野邊の月のいろに歸りて
寐むとおもひそめぬる

戸を鎖せる宿へは寄らずそのまゝに野邊に
ゆく夜の月のいろかな

むすびたる夢のうちにてさめざめと泣きて
醒めたる身にてありけり

うつぶして泣きたくなりぬ秋の灯のいろ身
にしむといふにあらねど

みづからのこともわすれてあはれなる人の
話に泣きたりしかな

いつとなく泣きたき心はぐれゆけりさまよ
へる野のうすら明りに

庭先の小笹の群れをひとしきりさやがせて
ゆく風をながむる

寐てもすぐ寐られぬくせの二度ばかり寐が
へり打ちて眼の冴えにけり

はらはらと音せし如く覺えしが僅かに降り
て雨の止みけむ

はつきりと眼のさめたるに起きあがり帶を
締めたる秋の眞夜中

月のかげ水田のなかのさゞ波にちらつく秋
の夜となれりけり

月のかげ窓の金具にひやゝかにちらつく汽
車に眼をばつぶりき

風寒き秋の月夜の野の汽車の窓にも見えし
うす靄のいろ

氣のつきしときはまことにあはれなりわが
泣きながら破りし障子

故郷をたづねて母の膝に泣き物も言はずに
すぐ歸り來む

二十二のわが夏なりし母が手に頭撫でられ
ふして泣きしは

何ひとつむくひしこともなきわれが母をお
もふて泣くは無益ぞ

涙乾き頰の皮膚少し硬るに心なぐさめ家を
出にけり

伊豆の國や三保のほとりや興津の海の朝を
しづかに漕ぎゆく小船

夕ざれば浪の音たかくなりまさる沖にかゝ
れる蜑の漁り火

富士の嶺に迷へる雲の雨となり麓野小松夜
はぬるゝらむ

雪降りぬひと夜さびしくたまゆらの夢をむ
すびてわがありしまに

生命ひとつこゝに迷へり夢に似て終りゆく
べき所を知らず

ひとつ消え一つ流るゝうたかたの浮むとも
なきわがこゝろかな

春淺き野に淡雪のふり來り今宵わが立ち泣
くところなし

春の夜のうすら明るき空に似るわがさびし
さのなつかしきかな

このまゝに生命は亡びゆくならむ迷ふより
げに知らざればなり

つひに身のまぬかれ難きさびしさと知りつ
ゝもなほそむくとすらむ

春の夜の月のほとりのうす雲のゆらぐとも
なく何群るゝらむ

おもふことあるにあらねどおぼろなる春の
夜空は打ち泣かるかな

あけがたの月の光のあはれなるなかにひそ
まむわが心ぞも

絶え絶えに嵐みだるゝなか空のいつともな
くや雨となるらむ

わが胸に雨の降るがにうなだれてゐる春の
夜に物をこそおもへ

夢も見ずさめたる朝のさびしさを極りもな
き生命ともせむ

宵闇の春の木の間を過ぎんとし涙流れぬ何
誘ひけむ

さびしさを求め求めていやはてにいかなる
ものの見え來るらむ

なぐさむることをば知らずのがれゆきて心
にさへもわが別るらむ

ともすれば涙流すはいたづらに身を亡ぼさ
ん心なるべし

むきむきにわれらが幸のわかれゆきてゆく
へも知らずあり終りけり

わが泣くは泣かじと心抑へつゝあるよりも
げにあはれなりにき

そよ風吹き若葉のかげの濁江にうつれば月
のいづる武藏野

濁りたる大野の風に揉まれたる陽は赤き玉
となりて沈めり

野に來れば畊やさるべく土塊のそよ風のな
かにはてなかりけり

紫の花あやめ咲く濁江のゆふべゆふべの野
邊のさびしさ

葉がくれに搖らぎて咲けるうす青き花にも
見ゆる夏のあはれさ

卷末に附して

土田杏村

水明が歌集を出すといふ事を聞いて一等喜ぶものは、水明の母君の次に屹度僕だらうと思ふ。水明――僕は彼を呼ぶにいつも君とも氏とも言つては居ない。僕にとつては言ひプ放しに水明といふのが最も自分に親しい氣がする。――弟の樣に思つて居る水明が、兎に角此處まで漕ぎ附けて來たかと思ふと、僕は涙の出る程有難い氣がするのである。水明といふ人は未だ文壇の口癖になる程には認められて居ないし、又今から其んな事があつては却つて水明の將來を害するものだとは思ふが、兎に角歌壇

に一流の人々の短歌と比較して少しも遜色の無いものである。水明の前では一遍も彼を褒めた事の無い僕も、――其の實他人には極力褒めて紹介して居た、――此處では立派に褒めて置いて好いと思ふ。

今度の歌集について直ぐに思ひ出すのは新潟時代の僕等の一團の人達である。『彼の人達はどうなつたかなあ。』さう言つて杉雨(金子)と僕とが寄ると直ぐに昔話に時のたつのを忘れたが、今では杉雨も東京に居ないし、今度は水明と僕とが寄ると必らず今の言葉を繰り返して居る。

彼の人達の一團は『ウシホ會』といふ名であつた。僕等が新潟の學校の二年生であつた時、短歌に趣味の深い同級生が丁度十人集つて、熱心に文學を研究する事に相

談した。其頃僕等の學校では本校から寄宿舍までが悉皆類燒の厄にかゝつた爲め、僕等は散り〳〵ばら〳〵に市中へ下宿するし、教室は中學の講堂を板で幾つかに仕切つて騷々しい中で授業を續けて居た。授業も何も浮の空で聞き流して休みの時間になると直ぐにウシホ會の話に移り、日曜になると紫宵(志賀)の下宿に集まつて短歌の小集を催した。其頃僕は無花果畑の中の黑塀のある家の二階に間借りをして居ると、直ぐ前には搾乳場があつて牛が始終ないて居るし、其の脇には水車場があつて始終轟々言ひ、夕方になると青い空を雁が泣いて通つた。其等を窓から見て居ると僕はいつも何とも知れない悲しい氣になつて、ハーモニカを吹き吹き同じ小路の奥の方に住

んで居る紫宵のところへ遊びに行つたものである。ウシホ會では紫宵が自然牛耳をとる樣になつて居た。其れは紫宵が東京の雜誌で新體詩や短歌で一等や天許りを取り續けて居るし、雜誌も詩集も澤山に見て、誰れよりも眞劍に文藝に親しんで居たからである。紫宵に次いでは桂華(小柳峯外(佐藤澪二(市島)江波(平田)楚絃(久我)などゝ言ふ人が始終紫宵の家に集まつて來た。雜誌の古い投書家諸君は乾度今言つた人達の名前を記憶せられて居るに違ひないと思ふ。

其の時分の事を僕は一度小說に書いて見たいと思つて居るが、今思ひ出しても面白い事は澤山ある。雜誌『ウシホ』を發刊し出したのも其の時である。印刷所へ交渉

に行つたり、新聞社へ問合せに行つたり、今考へると其の時分は隨分日の長い呑氣な生活をして居たやうだ。もと〳〵身體の弱かつた紫宵は、(弱いと言つても紫宵と杉雨と峯外と紅波はボートのチヤンピオンであつた。)肋膜を惡くして、臥床しながら或る女を深く深く思ひ焦れる樣になつて來た。僕もやはり或る女と戀して感傷的な心は益々感傷的になり、彼女の學校の寄宿舍の見える無花果畑の中を夕方ぐる〳〵廻つて來たりした。

三年生になつた時に杉雨と峯外と僕とは新入生の室の副室長になつて行かねばならぬ事になり、僕は入舍の運命をどうしても免れる事が出來なくなつた。新入生の室へ行く室長は成績のいゝ操行のしつかりした模範生とい

ふ事に極つて居たもので、其頃はウシホ會の連中は一人も成績の惡い人は無かつたのだ。種々言拔けて相變らず外泊して居ようと計つた僕も、了ひにはやつぱり寄宿舍の人になつて了つたが、今の三人は不思議にも同じ室へ副室長になつていつた。どんな新入生が來るか知らんと待つて居ると如何にも不慣れらしい樣子で這入つて來て『宜しく頼みます』といつて挨拶をする十人許りの若い人の中に、大きい眼をしてぼうつと人の顏を見て居る殊更若い一人が私の眼に直きに移つて來た。其れが水明であつたのである。

其んなにして水明と僕とは相知つたが、最もよく水明と接する樣になつたのは僕が四年生になつた頃からと覺

えて居る。ウシホ會の連中には其の時分に一大革命が有つたと言つてもよいので、成績のよかつた連中がだんだんに惡くなり、紫宵は病氣で休學して了ひ、峯外は家庭の都合で退學して歸鄉し、紅波と楚絃は何かの事で學校の方から退學させられた。其後峯外は少しも便りをしない樣になり、後で聞いたのであるが肺を惡くして新潟の病院へなど來て居たけれど家へ歸つて死んだそうであるし、紫宵も田舍へ歸つたきり消息が知れなくなつた。『ウシホ會』は雜誌ももう止めて了ひ、新らしい會員を入れて(水明も無論其の中の一人であつた)小集を時々開いたが一向氣乘りがしなくなつた。併し個人的には水明が閃きのある歌を歌ひ出して來るし、信(桂華の後の名)が中央歌

壇て認められて居た。

僕は澪二と水明とに最も深く交はつて僕等三人はよく一緒に菓子などを食べた。丁度其の時僕は新潟新聞へ宗教を攻撃した評論を發表して非常に人氣を得、二個月の間先輩の人達と論難攻撃をして居たので話の題目は常に其んな事が中心になつた。先きの女に苦しい別れをしてもう戀などは決してしないと心に誓つて居た僕が、暑中休暇中に兄妹の樣に親しくなつたsの事を休暇後學校へ歸つて澪二と水明に話すと、水明達は『其れは戀だ』といひ僕は『戀で無い』といつて議論した事を僕は今はつきりと覺えて居る。其後sの事は水明は知らないだらうが、やつぱり僕等は戀し合つて居たのである事は、最後

の悲しい別れをする時に取り換したロオマ字書きの手紙でやつと互ひに打ち明けたのであつた。其んな昔を偲ぶと僕はもう遣瀬ない思ひに襲はれてもう一遍sに逢ひたい情に堪へなくなる。

水明は其頃から短歌が次第に輝きのあるものになつて來た。『創作』に始終投書して居たが同誌では嶄然頭角を現はす一人になつて牧水氏に深く信頼せられて居た。ウシホ會はもう水明の獨舞臺になつて了つた。水明は當時から今に至るまで變らない『山家集』の讃美者で、あの徹底した素直な歌を歌ふ西行に早く眼の着いたといふ事は、やはり水明の天分を思はせるものがある。水明は新潟新聞で跨風生といふ匿名の文學者と短歌に就て大いに

議論をするし、雜誌の方では次第に認められて來ると言ふ譯で、水明のフェエムがだん〳〵高くなつた。其時に僕等はもう卒業して了ひ、杉雨と僕とは東京の學校へ這入るし、『ウシホ』の其の他の連中は地方の小學校へ奉職した。『ウシホ會』は水明が依然として繼續してくれるといふので皆んなは力を强うして後の事を君に囑望しつゝ別れ別れになつて了つた。

東京へ僕が來てからも手紙の往復は水明との間に頻々と取り換はされた。僕はなんでも日記を書く樣の氣分で水明と澪二とには手紙を書いて居たやうで、澪二との間には今でもその狀態を繼續し、十日に置かず手紙を往復して居る次第である。水明へ遣る手紙にはどんな時にも

僕は彼の歌を褒めてやつた事は無い。其れは學校の人から水明が近來學校の方をなまけて少し注意人物になつて居るといふ事を頻々として言つて來るので、もしもの事があつては水明の一生を誤るし、家に待つて居られる母君が可愛そうでならないと思つたからで、水明へはいつも、生活の爲めに藝術があるので、藝術の爲めに生活があるのでは無いから、水明の樣に學校をなまける事は駄目だといつて歌を罵倒してやつた。丁度其の時水明は自費で少さい歌集を出したので、僕のところへも送つて來たから僕はやはり頭の天邊から罵倒して、『其んな小さな歌を歌集にして出して文壇に何の反動があるか。其んな馬鹿な事はよして眞劍に勉强し給へ』と言つてやつたが

此れには水明もすつかり憤慨したと見えて長い長い痛罵の手紙を僕のところへ寄越して絶交を申込んで來た。僕は今でも其の時の事をよく記憶して居るが、丁度冬の休みで僕は川崎の先きの大島へ行つて勉强して居る時であつた。枯葦の騷ぐ音を聞きながら夜長い手紙を書いて水明へ出した記憶が今あり〳〵と眼に見る樣である。『君は多く知つたゞけで文學の鑑賞力がまるで無い。君は馬鹿だ。誇大妄想だ。』其んな意味の事が水明の手紙にはあつたし、『今は君が何と評してもよい。數年後に僕が文壇へ乘り出した時を見よ。僕は實際誰れよりも偉い積りで自負して居る。君を罵倒するのは僕は君のために言つて居るのだが其れが分らなければ絶交してもよい。昔の水明

は屹度後になつて僕のところへ歸つて來るに相違ない。』其んな言葉が僕の手紙にあつた樣に思ふ。

其後三年間といふもの水明と僕との間は打ち絶えて了つた。『帝二』などから聞傳てに水明がやがて學校を退學した事、故郷へ歸つて居る事などをあとで知つたが、其時僕はいつも『可愛想な事をした、母君はどんなに痛ましく思つて居るだらう。』と同情の念に堪へないで、夏休みに歸省の途次中里村——水明の郷里——の附近を汽車が通る時には、僕はいつも此の奥に水明は暮らして居るんだなと思つて情ない氣になつた。

さうして居る中に水明が多摩川の邊りに居るらしい樣子が『創作』の歌で分つて來た。負けず嫌ひの水明が愈

々東京へ出て來たなと思つて、毎月店頭で新刊雜誌を漁る時には『創作』を屹度開いて水明の歌だけ讀む樣になつた。官學に這入つて居る僕の事などを心で罵倒して居るであらうと思ふと微笑まれぬでも無かつたが、どうしても水明は歸つて來るといふ氣だけは僕の頭腦を去らなかつた。そうして居る間に僕はもう大抵文壇へ乘り出してもよい頃だと思つたので、昨年の十一月に論文『文明思潮と新哲學』を出版するし今年の二月から雜誌『新評論』に執筆する樣になつた。自分が偉いので人が馬鹿だといふ心と、今に見よすべての人は自分の膝下に屈して來るといふ昂然たる態度は、昔も今も變らないので、其れを誇大妄想だと言はうが傲慢だと笑はうが、將來事實

に於て否應なく證明して見せるといふ決心と抱負があるから今は何と言はれようと構はない。

今年の二月の事であつたと思ふ。水明から急に手紙を貰つたが僕は上書きを一見して直ぐに水明だと分つた。大急ぎで封を切つて手紙を讀んだ時、あの邪氣の無い素直な水明の人格が躍如として文面に現はれて居るので『水明は歸つた水明は歸つた』と嬉しくて溜らず、其の日直ぐに水明の居る本鄕へ訪ねて行つた。靴を泥だらけにしながら何度も何度も途を聞いてやつと水明の居る印刷所を搜し當、昔ながらのあの水明の顏を見た時には僕はもう水明に飛び付きたい程懷かしかつた。水明がちよい〳〵僕のところへ遊びに來、幾分なりとも自分の固執主

張して居る哲學を水明は認めてくれるし、僕は又昔より
も烈しく而かも皮肉に水明の品性と行爲とに付いて批評
する樣になつたのは其れ以後の事である。どうしても弟
としか思はれない水明に對してさうする差出がましい僕
の　爲を、水明は要らぬ御苦勞だとも、無憎に自重する
なとも言つてはくれまいと思ふ。事實僕等二人は新潟時
代の『ウシホ』の氣分に歸つて益々親しくなつて來て居
るのである。

水明の歌壇に於ける位置は第一流の其等の人の中に加
へて決して潛越な事では無いと僕は信ずる。又僕の評論
界に於ける位置は僕の信念と實力がどうあらうと社會は
第五流第六流の末席に連ねて少しも不思議が無い。さう

考へる時にフエエムの點に於て(僕は敢てメリツトとは言
はない)水明が僕よりも數等高く位置して誠に正等な事で
ある。併しながら其時にも僕は依然として水明に皮肉を
言ひ、水明に忠告する權能を持つて居ると僕が信ずるの
は、水明は僕の弟だといふ僕の感情からである。

何度も言ふが水明は邪氣の無い素直な人である。新潟
に於ける水明と東京に於ける水明とを比較して、僕が『水
明はよつ程人が惡くなつたよ。』と言ふと、水明は『其れ
はそうよ。だが其れは水明が弱いからだよ。水明が强い
人間であつたら人が惡くなりやうが無いぢやあないか。
僕は今までの經路を顧みて大變な事をしたと思ふよ。』と
誰れを相手でも無い樣な感傷的な眼で答へる。僕のあた

まにも水明の經路はまざ〳〵と浮んで來て、痛ましい事だとは思ひながらいら〳〵して居る水明に疊み掛けて、『其の弱い事を食ひ物にしてはいけない。』と皮肉を言ふ程殘虐であつた。言ひながらも僕の心中には、玉の樣な水明の心がともすれば彼の境遇によつて破壞せられようとしつゝ、今日まで傷けずに來て居る事が貴くてならなかつた。そして水明が僕の手許へ歸つて來て居る以上は何人によつても僕は斷じて水明の人格を破らせまいと決心した。

水明の歌其の物に就ては多くの專門家が何とか紹介してくれるであらう。たゞ水明の人格、水明の短歌に其の背景となつて居る『ウシホ』の事は、目下のところ僕を

おいて語り得るものは東京に居ないのである。水明が歌集を出すと言へば僕は直ぐにあの連中はどうなつたらうなあと『ウシホ』を思ひ出す。彼の連中の中で水明一人が本物になつた。彼の連中がどうかした機會に水明の歌集を讀む事があつたら水明の歌や僕の文を見てくれてどんなに昔を回顧するだらう。水明はもつともつと偉くなつて貰ひたい。水明許りが今『ウシホ』の中で殘つて居る。

思はず長く書いて了つた。讀み返して見れば水明の紹介よりも彼の連中の事の方が多い樣の氣もする。僕は其の點を飽くまでも水明に陳謝する。當り前なら明治大正の文學史に何の記錄も止めずに消えて行く『ウシホ』の

事が、此の光榮ある水明の歌集のお蔭によつて今幾分でも史料を殘して行く事は此上も無く嬉しい。此んな拙文を書いて水明の人格を害し水明の詩集を不純にした罪はどんなに强く水明から叱られても遺憾は無い。(四、五、二八)

大正四年六月三十日印刷□
大正四年七月十日發行□

▼歌集 生靈 定價金六十錢

著作權所有

著者 小川水明
發行者 東京市淺草區下平右衛門町九番地 岡村庄兵衛
印刷者 東京市神田區表神保町十番地 今成溫平

發行所 東京市淺草區柳橋通り 岡村書店 電話下谷四二〇四番 振替東京一九〇六五番

■詩集と歌集■

▼富田碎花 歌集 **悲しき愛** 定價金七十五錢 送料金八錢

▼尾山篤二郎 歌集 **さすらひ** 定價金七十五錢 送料金八錢

▼原田琴子 歌集 **ふるへる花** 定價金六十錢 送料金六錢

▼富田碎花 詩集 **末日頌** 定價金一圓廿錢 送料金十二錢

▼中村秀淨 詩集 **心の故郷** 定價金六十錢 送料金六錢

▼尾山篤二郎 **大正一萬歌集** 定價金九十五錢 送料金八錢

▼前田夕暮 歌集 **陰影** 定價金七十錢 送料金八錢

一九二四
大正一三一二一五